令和元年度宮城大学後援会主催事業
「講演会」報告

命をつなぐ

「ないものねだり」から

「あるものさがし」へ。

「命」をつないでいくための

「宮城学」の可能性を模索します

結城登美雄氏講演会＆パネルディスカッションを開催しました。

2019 年 11 月 9 日（土）宮城大学大和キャンパス講堂において、宮城大学後援会主催事業「結城登美雄氏講演会＆パネルディスカッション」を開催いたしました。

当日は会員をはじめ地域の方など県内外から来場され結城登美雄氏の優しい語りの講演を聴講しました。また、パネルディスカッションではコーディネーターの押切氏の軽快な語りで、結城氏、鈴木氏、3 学群の教員パネリストのトークが繰り広げられました。そこからは宮城大学の実学で蓄積されたものを次の展開へと結びつけるための“ヒント”や“期待されている事”を沢山知ることとなりました。そして来場者おひとりお一人も“地域と自分”を見つめ直す機会になったのかもしれません。

また、講演会開催にあわせ、教員、研究室、地域連携センター、復興人材育成プログラム推進室のご協力をいただき、来場者の方々に宮城大学の活動・研究の成果をご覧いただきました。

末筆になりましたが、登壇者、来場者、御協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

主催　宮城大学後援会
共催　宮　城　大　学

ごあいさつ　　宮城大学後援会　会長　佐藤功太郎

本日は宮城大学後援会主催の講演会とパネルディスカッションにお越しいただき、まことにありがとうございます。宮城大学後援会では、毎年著名な方々を講師としてお招きして講演会を開催しております。今回は講師に結城登美雄先生をお迎えしてご講演をいただきますが、これに加えて新しい試みとして、一般社団法人サステナブルデザイン工房代表理事の押切珠喜さんをコーディネーターにお迎えし、さらにゲストとして河北新報社常務取締役の鈴木素雄さんをお迎えした中で、結城先生と宮城大学の 3 学群の先生にパネルディスカッションをしていただきます。

今まで誰も経験したことのない人口減少、超高齢化社会が進行する中で重要なことは、これまでの歴史を踏まえ、さまざまな分野が連携し課題を解決していくことだと考えます。宮城大学が学部制から学群制になって 3 年がたつ今、宮城大学のこれまでの歩みを踏まえ、未来に向け地域に根差す大学として何をするべきか、どんな社会的役割を果たしていくべきかについて、大いに語り合っていただきたいと思います。

本日の講演会とパネルディスカッションが宮城大学各学群の融合による地域課題の解決を初め、宮城県、東北、全国の発展につながる一助となればと後援会役員一同心より祈念しているところであります。

第 1 部　講演 「命をつなぐ～　東北に生きる民に学んで」

講師　民俗研究家　結城登美雄氏

◆プロフィール◆

旧満州（中国東北部）生まれ。山形大学卒業後、広告デザイン業界に入る。20 年にわたり東北の農山漁村をフィールドワークしながら、住民を主体にした地域づくりの手法「地元学」を提唱。出版界、演劇界、学者、研究者、建築家などとネットワークしながら、宮城県内及び東北各地で地域おこしの活動を行っている。宮城県宮崎町（現加美町）の「食の文化祭」や、北上町（現石巻市）での「宮城食育の里づくり」ではアドバイザー、旧鳴子町「鳴子の米プロジェクト」の総合プロデューサーをつとめた。雑誌や新聞を中心に農と地域づくりについて執筆中。

結城と申します。よろしくお願いします。

スライドを用意しましたので、それをご覧いただきながら、宮城大学と私たちのこれからにとって私なりに大事だと思うことをお話できたらと思っております。

これは宮城県の唐桑半島です。

向こうが海でこちらが畑です。「ここは疲れない、ここはごちそうが次々にやってくる、ここは私のデパート、畑仕

事に飽きたら海仕事、海仕事に飽きたら陸仕事、ここは安心して生きていけるところだよ」。

仙台で広告の仕事を忙しくやっている自分にとってここを訪ねたときに聞いた言葉は今でも忘れられません。1995 年ころから世の中はバブル崩壊で非正規雇用がどんどん増えて経済の見通しも立たなくて、失われた 10 年、20 年などと言われている中で、私も会社を閉じまして、一人で東北各地の海辺、山間地、農村を歩き始めて、そこから教えてもらおうと思って歩いてまいりました。きょうは東北に生きる人々から教えてもらったことを私なりに皆さんにお伝えしたいと思います。

企業の力、政治の力、行政の力、いろいろな力が私たちの生活や社会を支えてくれていますが、その力が少し頼りなくなってきて、必ずしも全幅の信頼をおけなくなってきましたので、どうしたらいいかと考えたときに、私は地域の力がこれから大変重要なのではないかと思いました。地域の力と言いましても地域とは何かと聞かれましたら皆様はどのようにお答えになるでしょうか。私も歩きながらいろいろ悩みましてわかったことがあります。

ここに私がいます。私の家族がいます。今は生きていることを前提に一人でも家族であります。その家族が集まって村をなしたり町をなしたり、これが地域です。その地域が集まって国をなし、国が集まり世界をなしていますが、その一番中心のところに地域というものがあるのではないかと思います。ですから地域とは家族の集まりを言うのだと思いたいわけです。エリアやマーケット、コミュニティなど地域のとらえ方はいろいろありますが、私は、地域は家族の集まりであると勝手に定義をしています。ですが、人が生きて暮らす場でもあり、そこを人生の場にする、そういう場でもあります。

では、家族が地域をなしているとするならば家族とは何だろうかと考えてみますと、ラテン語では Familia です。Familia から Family が生まれますが、もう 1 つ実は Farmer という言葉も Family と兄弟だと言えるかと思います。この言葉には深い意味があると考えておりまして、これを私なりに勝手に解釈すれば、一緒に耕し一緒に食べるものたち、これが家族だというふうに考えています。今から 4～50 年前までの日本人はほとんどそうでありました。一緒に耕して一緒に食べていました。

これは青森県の田舎館村です。これは岩木山です。おじいちゃんがこれから田を起そうとして肥料をまいています。東北に稲作が定着したのは鎌倉時代だと考古学会と作物学会は 1981 年までは定義していましたが、これを覆した遺跡が 1981 年に東北大の伊藤先生によって発掘されました垂柳遺跡です。ここに水路があります。これはミニ水田です。565 枚出てきました。もう弥生のときに九州に稲作が伝わったと聞いてからそんなに年月がたっていない時期にもうすでに東北の青森にできていたのです。畳 2 枚分のミニ水田です。これが 565 枚。そこには足跡もちゃんと残っておりました。このおじいさんが今耕しているのはここで、ここから 60 センチ掘ったところがこれです。一人で稲を運んでいたのです。子どもやお母さん、おばあちゃんの足跡もありましたので、6～7 人の家族が一緒に作業をしている弥生の家族の足跡が、青森と言いますと山内丸山縄文だという考え方、司馬遼太郎さんもそれに影響されて、なぜ青森は寒さ厳しいところで稲作をするのだ、だから貧しいのだみたいなことを本に書いていますが、司馬さんに文句を言いたかったと思いますが、でも、この田んぼができることによって、東北に米というのはとても大きな意味があります。長き冬を安心して暮らすための食料です。11 月半ばから翌年の 4 月いっぱい、東北の地に雪が積もり作物は育ちません。東北の農山村、漁村のお母さんたちは半年分の食料をどうストックするかに思いをいたしてがんばったのです。

そうすることによって初めて、そうでなければどこかに移動して、縄文というのは移動民族でロマンチックだなどとばかな言い方をする人もいますが不安なのです。きょう食べるもの、明日食べるものがわからない、その不安を縄文の家族はいつも思っていたと私は想像します。ところが弥生の家族は田んぼができて定住ができるようになりま

した。定住というのはここで暮らせるということです。移動しなくていいということです。長い年月移動でした。食料が安定してあるということで定住になった、それを支えているのが田んぼであります。

村というのは群なり集まり暮らすというところから出たのだという説があります。数に限りがありますので集落の大きさは限界があるのですが、明治の初め日本には3,500 万人の人口があったそうです。そのうちの 9 割は小さな村に暮らしていました。例えばこのような村です。村の平均規模は戸数にして 60～70 戸で人口にして370 人ぐらいです。このぐらいの大きさの村が平均 7 万1,314、見てください、東北は天保年間合わせて6,962 村があり、260 万人、村平均 378 人です。

これは国勢調査が始まった年ですが、579 万、戦後の昭和 25 年が 900 万、平成 17 年 960 万、現在880 万、人口が増えるといいとか少ないとだめだとか、過疎だとか限界集落だとか数字ですぐ判断したがりますが、人口は増えもせず減りもしません。そんなに大きな変化はありませんが、年齢はずいぶん変わってきてしまいました。

私は昭和 20 年生まれなのでもう 74 でありますが、昭和25年の65歳以上は4.9%でしたが、今は28%なのです。ずいぶん社会は変わりました。14 歳以下の子どもも 35%いましたが今は 12%に減りました。人口構造がずいぶん変わってきています。いろいろなことが変わる 1 つの元はそこに暮らす人々の変化です。

人生 90 歳だとするならば、子どもの時代の 15 歳、ここに学校があります。宮城大学もこのあたりにあります。でも、どうしても企業社会に行くということを前提に長いこと戦後の教育というのは続いてきましたが、もう 1 つ家族が集まって暮らす生活の場の地域社会、こっちのほうには関心がいきますがこっちにはあまり関心を持たずに、だけれどもここが終わった人たちが戻って来る地域社会、老人が増えています。そうするとずいぶんそれぞれの土地、土地でいろいろなテーマ、課題があるはずなのです。

少子化があり高齢化がある、単身世帯が多い、100戸のマンションだけれども誰も知っている人もいない、あいさつする人も一人もいないということが当たり前だそうです。貧困の格差も出てきました。非正規雇用の問題もあるでしょう、グローバリズムの影響もあるでしょう、こういう中で私たちは不幸に引っ張られてしまってなかなか企業社会に意識は行っても地域社会の課題について、あるいは役割について関心を持続することができないでいるような気がします。

地域とは家族の集まりである。地域づくりとはその家族が思っている課題を解決したり願いを実現したりしていく。家族の願いや課題、この 2 つのことを受けて、それをみんなの力で解決していくこと、あるいは実現していくこと。

私はうろうろと東北を 25 年ほど歩き回って、その土地で親しくなった人たちに甘えていろいろなことを聞かせていただきました。家族はどんな願いと悩みを抱いているか。例えばこれは山形の西川町という雪深いところですが、季節が冬だったのでなおさら除雪のことなどいろいろな困難が出てきます。こうなってくれたらいいなという願いも持っています。ポストイットの赤と青を持って、その土地の人たちに赤い色に悩みや課題を書いてもらったのですが、最初は遠慮して書かなかったのですが書き始めるとみんなが書きます。青にはこうしたいという夢や願いを書いてもらいました。

仕事に関すること、地元に根差した仕事がない、野菜をおすそ分けしたい、ワサビ栽培したい、週末だけの田舎レストラン、基幹集落にそば屋を一軒開店させたい。

コミュニティのことも出てきます。こういう会話をするところがなくなった、寄り合いや酒飲みをしなくなった、一人暮らしが多くなったようだ、団らんの場を作れないか等々。

居住環境のことでは、若いころは気にならなかったけれど、この坂道は滑って苦労しているのでもう少し緩やかにならないか、雪をどうにかしてくれないかなどいっぱいあります。

文化とは何か、そんなに堅苦しくないです。文化とは皆で楽しむこと、これが村の人たちの答えです。皆で絵画を楽しむのを美術館だ、皆で音楽を楽しむのが音楽

ホール、コンサートだ、皆で一緒にお芝居を楽しむこと、おじいちゃんとおばあちゃんの会話の中で「ねえ、おじいちゃん、パチンコは文化じゃないよね」と、おばあちゃんはなかなか深い人です。そういうのを教えてもらいます。

学びのことについて、知るための学びではなくて生かすための学びがない、知識は忘れてしまうけれども、ここにある木を草を葉っぱをどう生かすかを知りたいのだ。漬物の教室があるといい、これが意外と多いのですが、もう漬物は今はもう食べないということですがニーズは多いのです。

少子化、高齢化の問題。人口が減った、結婚しない子どもが多くなった等々あります。

あとは行政に対して、それはたくさんはないです。

それを挙げると大体 7 つぐらいのテーマがあります。いい自然風土があるとこと。自然というのは海や川や山や田んぼや畑、風土というのは水と風と光と土の組み合わせです。

この風土の違いが作物の違い、暮らしの違いになります。ここに月々3 万ぐらいの仕事がないか。年を取ると 3 万の仕事ではだめだ、30 万でなきゃというのが例えば 1 日 1,000 円特売所をやろうか、1 日 1,000 円売れた、1 ヵ月で 3 万になった、よしもっとがんばろう、5 万円になった、7 万円になったと、でもそういう 3 万、2 万の小さな数字に都市の人たちは何の関心も示さない。どれだけの GDP になるかみたいな話だけです。

よい居住近況があること、よい文化があること、よい仲間がいること、これがものすごく大事なのですが、今なかなか仲間がいないのです。よい学びの場、知るための学びではなくて生かすための学び、そしてよい行政の 7 つです。

そういうのを少し教えてくれた現場に行きますと、これは福島の桧枝岐村というところです。たくさんの自治体がありますけれども、このあたりに役場がありますが、標高 940 メートルです。ずいぶん標高の高いところにある自治体かと思います。そして東北で唯一いまだ米一粒も実らないところです。栽培ができないのです。1,500 メートルぐらいの山がありまして東からの日が当たるのが 9～10 時ぐらいで 2 時か 3 時にはまた陰ってしまうので日照不足もあって標高が高くて寒いので東北では唯一田んぼが 1 枚もないところです。そんなところでどれほどの暮らしができるのか、みたいに勝手に思っていたのですが、ここにはいろいろなことを教えてもらいました。

バスを役場前で降りるとお墓が「いらっしゃい」と歓迎してくれます。250 戸ぐらいの集落ですが、姓は 3 つです。「橘」「平野」「星」だけです。ですから平家の落人だというので私が一番確かだと思ったのはここであります。でも、ここに 270 年、米も採れないような厳しい生活、働くことはがんばるが、働くだけが人生ではない、暮らしではない、楽しみを作ろうといってお伊勢参りのときに見てきた江戸の歌舞伎を真似して 270 年前に桧枝岐の村歌舞伎を作りました。以来毎年 3 回ぐらいやっていますが満員になります。すごいです。国の重要無形民俗文化財です。特区から補助金が出たわけではありません。そういうところでどなたかがこれからは地方は消滅するなどということを霞が関系のおじさんたちが寄ってたかって数字合わせをして、その人たちに言いました。桧枝岐村が 30 年後につぶれてなかったらお前たちはどういう責任を取るか、地方消滅などと余計なことを勝手な数字で人の村を傷つけるな、失敬だと私は言いました。見てください、今現在の人口は 608 人です。

そしてこのおばあちゃんはこうやっていつも夏になると花に水やりをしてくれているのです。ここは生きている人間の家で、死んだ方の家がお墓だよ、それをつなぐ食べ物、トウモロコシ、天保のころ子を亡くして間引きしたりしてつらい思いをした家族がいっぱいいます。だから毎月 1 回誰かがこのお地蔵さんの衣装を取り換えています。

そしてこんな厳しいところでも楽しいこともあるし、ここが私の生きる場、人生の場であります。

小さな資料館に行くとお米を作る道具は 1 つもありません。この中にわら靴があったのです。米が採れないのにわら靴はおかしいなと思いましたら説明がありました。桧枝岐村では米が採れなかったので隣村からわらを購入して雪上用の履物として作り、主に天気のいい日に使った。晴れの日の履物なのです。14 キロ離れた隣村までわらを買いに行くのです。と同時にもう１つ、桧枝岐村の人たちは 15 の春になると、カロウトを作ってもらったそうです。カロウトとは唐びつという意味でもあります。女性は 15 の春にこれを作り、男は 20 歳です。そしてこのカロウトに花嫁衣裳も入るでしょうが道具を身に着けて嫁ぎ先にこれを持って行きます。そして結婚して子を産み、子を育て家族を養い、最後に死ぬとこれが棺桶になります。嫁ぐ日の器にして、最後は人間がそこに入る。衣類などの持ち物を入れて嫁入りし、道具とし、亡くなったときは棺桶として入れられ土葬される、昭和 38 年です。世の中は厳しいことだけではない、楽しいこともいっぱいある。精いっぱいがんばって生きなさい、これが親が子にカロウトを渡すときの言葉として多いそうです。

限りある命だが、一生懸命いい人生を送りなさい、こういう言葉がちゃんと地域に生きていく人たちの支えになっています。

これは新庄です。接引寺というお寺があります。曲がり角のお寺の地蔵さんです。

3 月、春の彼岸、9 月、秋彼岸のときにみんながこんなふうにお墓参りに来た後にお地蔵さんに手を合わせていきます。そして重箱におはぎなどを入れてきて「お地蔵さん、亡くなった子どもたちのために食べてください」。お地蔵さんの口はなぜ黒いのか、3,000、5,000 人ともいえる餓死者を出してしまった時期のその思いを今なお忘れずに新庄祭りの山車は、ユネスコ文化遺産に登録されましたが、ユネスコばかり追いかけて、だけどこの新庄祭りはこの餓死者を何千人と出した、みんなが力を合わせてがんばろう、みんなを奮い立たせ供養をしてちゃんと生きていこうと教えてるために生まれたのが新庄祭りであります。そういう心を忘れて変な価値観にばかりおもねていってしまう大人たちのいかに多いことか。

これは新潟の上越です。横畑。ここに大きい家がありますがこのおばあさんはここに一人で暮らしです。どこに行っても一人暮らしの人が圧倒的に多いです。でもおのおばあさんは自分の家の庭に花が 10 種類ぐらいいつも植えてあります。きょうはダリアを切っていました。どこに行くのでしょうか、観音堂です。前に供えていた花を取り、花瓶を持って洗って、そしてここでお掃除を全部し終わってから「観音様、村のみんなを守ってくれてありがとうございます」そういうお祈りをするのです。

花卉栽培で儲かる農業、これも大事でしょう、ですがおばあさんに言わせれば花は供養の花です。そんなふうにして後ろ姿を見送る、ときどきはお団子があげてあります。この観音堂をずっと一人でみんなに代わって守ってくれる人がいる。お金をもらっているわけではない。でも心が生きています。それが私は東北だなとあちこちで思わされました。

と同時に海辺のほうに行きますと、新潟の村上や山形などもそうです、飢饉のときに鮭に救われたという村が実はものすごく多いのです。飢饉鮭。厳しいときは鮭が上ってきて最後に命救われたという村が多いです。

これは村人です。あの後ろあたりからまた鮭が上がっていきます。そして“ぼこぼこぼこ”と鮭打ちをやるのです。でもそれは全部シーズンが終わるとここの人たちは鮭の供養塔を建てます。「鮭を 1,000 本獲ったら人間を 1 人殺したと同じだと思いなさい」これは東北の流域に残っている教えであります。だからここで供養塔です。卒塔婆です。だから鮭の千本供養塔が日本海に建っています。こういうのをずっとたどっていくことが沿岸を歩くときの一つの、それは鮭だけではありません。そうするとどういうことが起きるか、鮭の部位と料理、鼻から氷頭、エラ、尾びれ、30～40 種類も料理があります。この料理の多様性はウロコたりとも無駄なく活かしなさい、それが料理の多様性という形で受け継がれています。

どこがトロか、などということしかない今の社会の中で、命をいただくということの大切さを教えてくれています。

このごろはプラスチックごみがどうだこうだという話もありますけれども、私もかつて工夫した、きれいだから観光にいいねというぐらいにしか見ていないのです。違うのです。われわれはそれにしか見えませんが、地域の漁師さんは、ここは全部漁場なのです。漁港なのです。海藻を獲るのです。小さな網を仕掛けるのです。それをわれわれはおすそ分けいただいて食べているわけです。北海道に次いで長崎と並んで宮城は漁業第 2 位か 3 位でいつもがんばってきました。でも、この一つ一つのところが漁場だと、そこにいろいろな赤魚の刺し網がありますとかあるではないですか、こういうところだから汚さないでくれ、荒らさないでくれ、そういうことを僕らは知らないので「はいはい」なのです。

でも、どこも小さな村です。小さい村は頼りないなんて考え方もありますが、ずっと何百年と村の暮らしを続けています。かつて 60 軒ありましたのが今は 20 軒に減って過疎だとか限界集落だとか心無いことを言われますけれども、「それでも私はここはいいよ、ここでは喧嘩もしたけれども一緒に苦労した仲間がいるから」というのです。

その 1 つとして今から 25 年前に初めて会った岩手県山形村、今は久慈市山形町になりましたが、5 戸 18 人当時そうです。今 3 戸で 12 人です。ここにずっと二十数年何十回、何百回とは言いませんが通ってきました。ここは行政から、こんな奥にいたって金がかかるだけだから下りろと言われたけれどもとどまると決意しました。そのときに昭和 60 年、「ただ生きるのではなくていい生きる場所にしよう」ということで村づくりの目標を立てました。

私はこの言葉を今でも自分が地域を考えるときの一番大事な言葉の 1 つだと思っています。ここに今 2,000 人、3,000 人年間学生たちが訪れています。すごいところです。東大の学生たちが勉強に来ます。農工大の学生、岩大の学生もいっぱい来ます。こういうところで作るということ、ここは金はないがものは作れるのだ、買うしか考えられないのか、お前たちはと言わんばかりに。

これはちょろちょろ流れる水をためて重くして、軽く流れるとドーンと精米するのです。これをバッタリーと言います。それを村の名前にして、ここにあるように「この村は与えられた自然立地を生かし」もう少し雪が降らなければいいなとか、もう少し寒さが緩やかだったらいいな、などと立地に対して文句を言っても変わらない。その立地をどう活かすか、活かし方がわからないから活かせないだけです。「この地に住むことに誇りを持ち、ひとり一芸何かをつくり」だから必要なものは全部作る、そして都会中心の価値観だけにとらわれずに「都会の後を追い求めず、独自の生活文化を伝統の中から創造し、集落の共同と和の精神で」自分たちの「生活を高めようとする村である」。

行くたびに生まれ変わっています。こうやって生きてきた。ここにたくさんの人が集まる。これ岩大の学生が、たくさんのことを教えていただいたのに何もできずにすみませんと言って、学んだ「人は一人では生きられない」とか「温故知新」とか書いてありますが、宿代代わりにして置いていく、その学生たちもいっぱいいます。2,000 人ぐらいの若者が訪れました。

村長さんがこう言っています、都会の後を追い求めずと言ったなと。このごろここに来る都会の人たちからいろいろなことを話しているうちに都会も厳しいのだということがわかってきたよ、だから訂正しようと思っているのだ。「都会の後を追い求めず」言葉はまだないが、「都会には良さだけあるのではなくて厳しさもある。農山村には厳しさだけではなくて良さもある。そのどちらを生きるかはその人の選択だ」そこまではわかったよ、でもまだ言葉は探しきれてないのだと 92 歳の老人が言っています。

そういう人たちが見てきた 30 年のこの日本、東北、山村、人間、そういう人たちの声に耳を傾けたいものだと思っています。

上越市の中ノ俣集落。54 戸で 90 人、平均年齢 70 歳。限界集落ですなと何もしないのが霞が関です。でも、ここを見ていくとみんな一人暮らし、この人は半年前にご主人を亡くしましたが、いつまでもうじうじしていられないよ、農作業だと。軽トラックがあまりないのです。こんな道路ばかりですから。スズキもホンダもダイハツもだめだな、みな言います。やはり耕運機なのです。

そこに 9 人の若者が今から 20 年近く前から集まり始めました。みんな大学の環境学部、環境が大事だと大学に入ったけれども、環境のものはいっぱいできたけれども仕事先はひとつもない、これが日本という国です。アメリカのマサチューセッツ工科大学なりケンブリッジに留学し、環境のことを勉強すればするほど、日本の農山村の 7 割近くを占める山林、18%の農地、そういうものを持っているここをちゃんとしなければいけないと言って日本のこの村に廃校になった学校を地球環境学校として彼らが、先生は村のおじいちゃん、おばあちゃんです。

村をフィールドワークしながら炭窯の見学会、ドラム缶のお風呂の立て方、いろいろなことをやりながら、金がなくてもなぜこの村は何百年も生きられたのか、それは身近にあるものを活かす技、力、知恵があったからだ。人々がみんな持っている、でも年を取ってその人が亡くなればそれは絶滅になってしまう。動物も絶滅危惧種ばかりに心を奪われないで、人間の絶滅、技の絶滅危惧種を調べよう。そうしたら左官をやる人が 5 人まだいる。これがいるからどこの土とどこの土を合わせればいい壁になるかわかる等々こういうのをみんな調べました。これはすごいことです。平成 13 年です。ここでも村の人にみんな技能を持つ達人という位置づけでできることを聞いていきました。

この女性はピアニストです。なかなかいい演奏をします。でもここに 1 年間修業に来ました。山で草刈りをし、棚田は全部完全に荒れ地がありません。上越市民 6,000 人に年間環境のことを現場で教えています。

水車の作り方をできる人に教えてもらって復元しました。それで米をついています。あばら家の屋根を全部吹き替えをみんなでやりまして、木を切り食堂にしたり、私はここの塾長が長かったので、これは私のウイスキー3 本です。いつも空になっています。でもここで飲むウイスキーはうまいです。

そして雪が深い。下してもらえるかと来ると若い衆が雪下ろし、道路作りに行ってくれます。若い人がフォローします。

そして冬の 12、1、2、3、4 と 5 ヵ月、一人暮らしが圧倒的に多いので人と話すことがない。だから週に 1 回 500 円弁当を食べる会というのにして、みんなこうやって集まって来ます。芸を発表してりいろいろやりながら 3 時間、休まないからコミュニティが戻っていきます。こういう意味で若い力がここに加わることによって地域の人たちの安心や力やいろいろな文化がまた再現されたりします。

でもこの人たちも年を取ってきました。この人たちがいて日本の食料は雪国の人たちが支えているというのが現実なのです。でも、だんだん食べ物が危ないなと思うようになっています。

宮城県で調べましたが、江戸時代、明治、大正、昭和に 460 回、災害が今問題になっていますが、津波だってもう 19 回きているのです。大雨も洪水も、洪水は 104 回起きています。いつどうなるかわからない、そのことを前提にどう対策していくかということは、それでもそんなときに食料はきっちり保とうと。これは食糧自給率です。秋田は米が多いから 192%、宮城は 72%、東京 1%、大阪 1%、神奈川 2%。東北はみんな高いのです。全国は 37 ですが東北しは 102、大豆も高い、野菜も果物も魚も、こういう良さをもう少し生かす道を考えられないか、なぜなら食べ物を作ってくれる農民や漁民がどんどん減って、見てください、2000 年には 389 万が今 181 万、2016 年には 160 万まで落ちました。土地があっても耕して種をまき、苗を植え育てる人がいないと食べ物はないのです。

宮城県は 2015 年には 5 万 4,000 人、みんな 70 歳以上です。39 歳以下はこれしかいません。七ヶ浜町は 25 人しかいません、七ヶ宿町は 148 人です。どんどんいなくなります。

誰が私たちの食べ物を作ってくれるのですか。それがいなくて 108 万の政令指定都市仙台はどうなっていくのですか。実際に 3,400 人しかいません。今 2,800 人です。1%いないのです。そういうことから私は食べる人と作る人の連携協力によって活路が見いだせないかと思ってやったものの 1 つに「鳴子の米プロジェクト」というのがあります。これは地域で支え合いましょうというものです。鳴子は農家数が、この 10 年で 738 戸から 620 戸に減り、水田、稲作が減っていき、耕作放棄地が 4 倍、5 倍に増えています。

そういう中で霞が関が、永田町が戦後最大の農政改革だなどと言って４ヘクタール以上の農民以外は応援しない、応援してもらいたかった小さな農家 20 ヘクタールまとまらないと集団営農でなければやらないという品目横断的経営安定対策という政策を設定しましたが、1 年しかもちませんでした。これによって鳴子では中山間地はほとんど政策対象外の地域になりました。それに対して私は反旗を翻して霞が関に乗り込んでも逃げられる一方でした。だから文句を言うなら俺がやると言って始めたのがここで秋田の県境の鳴子町鬼首地区です。

ここはほとんどが戦後開拓地です。昭和 20 年、ここに開拓に入ってきた 12 戸がこんなふうに鍬を振るいましたが酸性土壌でした。冷害の年もあって借金が増えて、昭和 43 年、二十数年間借金を払い続けてここまできたわけです。そこにお前らは小さいから相手にしないなどという、そんな政策を出してくる霞が関の連中に対して、私は文句言うなよと、俺はこれからはこの作り手と食べ手が向かい合って、互いに支え合う道を拓けないかということをやりました。

ひとめぼれがいい、こしひかりがいい、つやひめがいいというように変なブランドではない、その風土に合った米を試験場に行って 181 号を紹介してもらい、それを育てました。3 人の農家が始めました。農民というのは全部自分で値段を決められません。みんな市場が決めるのです。いらなくなると切り捨てられるのです。ですから自分たちで値段を決めようということで、生産者価格を当時 1 万 2,000 円だったのを 1 万 8,000 円にしました。1 俵 2 万 4,000 円で売りまして差額の 6,000 円は保管料、事務経費以外に次の若者の農業支援のために 181 号という新品種。そして米を売るのではない、ご飯を売るのだということで、ご飯の炊き方を 40 回テストして、ひとめぼれより 15%少ない水分のときにこの米が光り輝きました。それをおむすびにしました。100 種類のおむすびに土地のお母さんたちに協力してもらい、試食をし、納得してもらった上で買っていただきました。

豊という字は高坏（タカツキ）です。上に乗っているのが穀物の穂です。食べ物が身近にあることを豊と呼んだ時代が長かったのです。今は現金と株券がいっぱいあればという時代です。現金、株券があっても食い物買えなくなるかもしれません。

2 万 4,000 円は高いのではないかという声がいっぱいありましたが、その人たちに見せたのがこれです。人間は 60 キロ年間食べれば何杯のご飯になるか誰も知りませんでした。1,000 杯です。1 杯 24 円です。笹かま一切れ、いちご 1 つ、ポッキー5 本、それでショックを受けたのです。高いのか、これは。そうしたらいろいろな人が応援に来てくれて田植えなどこういうことを手伝ってくれるようになりました。

そして子どもたちに私は伝えました。10 メートル×10 メートルの田んぼから君の 1 年分のお米が採れるんだよと。そう教えたら、子どもたちは巻き尺を持ち出してあらゆる田が何人分かを測っていました。

そして田植えが終わった後、ここはあっため水と言いますが、赤ちゃんが風邪をひかないように額に手をやるお母さんのように、植えたばかりの赤ちゃん苗が風邪ひかないように雪解け水が入らないようにお天とう様に温めてもらって、毎日ここに来て水温を測って、これなら流せるとやってくれるのがおじいちゃんの役割。それにショックを受けて、ああ、おじいちゃんは単なる認知症でフラフラしている人だと思った。と中学生たちが来て謝って、おじいちゃん、お仕事ご苦労様ですと頭を下げるようになりました。

こういうことがわかってくると同時に米を当時 1 万 2,000 円の生産者価格だと時給 179 円でした。農水省に労働基準法違反だろうと言いましたら、そうではありません、農民は労働基準適用外職種ですと言われました。これが霞が関の答弁。

中学生たちが動き始めました。自分たちができること、そして最後に刈り取り終わるときに河北新報の見開き分は約 12 株です。これが私たちの 1 日のお米になります。ご飯 3 膳ないしはおにぎり 3 個です。それがわかったら中学生たちのお母さん、おじいちゃん、いろんな人に話

をして、なぜうちの子は米のこと、田んぼのことをやったのだろう。そうしたらうれしい報告がありました、中学生から。レポートがいっぱい来ました。母が一緒に鳴子の米を買おうと言ってくれました。それが地域で支え合うということです。

それでおむすび屋をオープンさせました。そして東京もおむすび権兵衛という 50 店舗ぐらいある大きいおむすび屋が鳴子の米だけのおにぎり屋を神田で始めました。そのときに卒論で来た早稲田の女の子が権兵衛に入って社長に頼んで鳴子のお米だけのおむすび屋をオープンさせて 3 年以上になります。

若い力、小さな力が大切なことを理解すると、買う、買わないではなくてそれを人に伝えるということによって、大きな変革が生まれていくのだと思いました。それを今年から野菜版で百万都市の食べる力と宮城・東北のつくる力をつなげないだろうか、こんなふうに思っているきょうこのごろであります。 これは駅の東のほうで月に 1 回やっています。鳴子の米プロジェクトは 15 年目になりますが、食でつながり支え合う都市と農山漁村という、そんな思いがしきりにいたします。

そういうことをぜひ宮城大学はそのベースがあるわけですから、連携しながら進んでいってもらいたいと思います。そうすることがよい学びになり、よい仕事になり、よい役割として多くの人たちに喜ばれることになっていくのではないかということ、これはこの後のシンポジウムではないかと思いますので、私の話はここで終わらせていただきます。ありがとうございました。

第２部　パネルディスカッション　　◆出演者プロフィール◆

パネリスト	◆佐々木 久美子（ささき くみこ）氏　宮城大学看護学群　教授 岩手県花巻市生まれ。大学を卒業後、母校の大学病院で看護師、岩手県に戻り岩手県庁に入職、保健所保健師等を経験する。2003 年 10 月宮城大学に入職、現在に至る。東日本大震災の発災直後から、看護学部学生・教職員と共に南三陸町及び気仙沼市において支援活動を展開した。特に、南三陸町においては、学生と共に地域の方々や地元保健師、関係団体との協働を重視しながら、被災地域における健康課題解決に向けた支援活動を行ってきた。
パネリスト	◆佐々木 秀之（ささき　ひでゆき）氏 宮城大学事業構想学群　准教授　兼　地域連携センター副センター長 仙台市生まれ。岩手大学農学部卒業後、商社勤務等を経て東北学院大学大学院経済学研究科へ入学。2011 年 3 月、「地域内格差としてのいわゆる駅裏研究」にて博士号（経済学）取得。復興活動では、仙台市宮城野区において「復興地元学」の作成に取り組む。2016 年 4 月より現職。担当講義は、地域資源論、社会起業論、コミュニティプランナー実践論。
パネリスト	◆川村 保（かわむら　たもつ）氏　宮城大学食産業学群　教授　兼　基盤教育群長 岩手県盛岡市生まれ。岩手大学農学部助教授を経て、2005 年より宮城大学食産業学部フードビジネス学科教授。組織替えで 2017 年より食産業学群フードマネジメント学類教授。現在、基盤教育群長と副学長を兼任している。専門はフードシステム論、食料経済学。博士（農学）。食料経済論、経済経営学基礎等の科目を担当し、特に、農協と食品流通に関心を持っている。
ゲスト	◆鈴木 素雄（すずき　もとお）氏 株式会社河北新報社 常務取締役（編集・論説・防災教育担当） 仙台市生まれ。立教大学法学部卒業。1980 年河北新報社入社。報道部副部長、山形総局長、論説委員長、取締役編集局長を経て、2017 年より現職。
コーディネーター	◆押切 珠喜（おしきり　たまき）氏　一般社団法人サステナブルデザイン工房代表理事 大阪府出身。山形県最上郡最上町赤倉地区日山温泉で、２度の火災で 15 年間廃業していた旅館跡に移り住み再建「温泉宿・ひやま山荘」を開業。その後も、14 年間廃業していた赤倉温泉内のペンション・山の湯ロッヂ を再興し居住。2011 年には東日本大震災発災と共にボランティアセンターを支援する会を設立し、ボランティア派遣のコーディネートを行う。2015 年にサステナブルデザイン工房を主宰し、山形県を中心に活躍中。
講師	◆結城　登美雄（ゆうき　とみお）氏　民俗研究家 ※プロフィールはＰ２参照

第２部　パネルディスカッション「命をつなぐ～“宮城学”は可能か？」

押切：きょうは、先ほど結城さんから地域とこれからの社会をどういうふうにしていくのかという話を地域からの視点で考えようというのと、宮城大学がそういう方向性に向けてどういうことができるのかということについてお話をしていただきました。

まずは、きょう登壇していただいております先生方からご自分の活動を自己紹介がてら画像を使いながらご説明いただきたいと思います。

１．パネリスト活動（自己）紹介

佐々木（久）：看護学群の佐々木です。どうぞよろしくお願いいたします。

看護学群は東日本大震災後、学生と教職員が南三陸町の健康課題に取り組んでまいりました。この活動の特徴は、地元の保健師と活動の内容を相談しながら、地元の地区長や民生委員、サポーターの方々の協力を得て展開したことにあります。これからその内容についてお話します。

学生たちは震災直後から被災地でのがれきの撤去作業を行う中で、看護学部の学生として自分たちにできることは何かを自問自答し、「みやぎ絆むすび隊」を立ち上げました。宮城大学は南三陸町で支援活動を行っていた関係もありまして、学生たちの思いを町の保健師に伝え、夏季休業を利用して一緒にできることがないかを相談しました。

同じころ、南三陸町の地区組織の会長とお話する機会があり、傾聴ボランティアを望んでいるのは津波の被害のあった仮設住宅に住んでいる被災者だけではなくて、山間地域の高齢者はデイサービスがなく、家の中に閉じこもっているので誰かと話をしたがっていると教えていただきました。

大学からは少し遠い地域でしたが、夏季休暇を利用し、3 泊 4 日、4 クール、学生と教職員が一緒に山間地域に住む高齢者を対象に傾聴ボランティア活動を開始しました。

活動にあたり、地区長さんにおじゃまする方々の了解を事前にとっていただき、またその情報を町の保健師さんに伝え、保健師さんからも訪問先の情報をいただき出かけ、終わった後は情報共有を図りました。

平成 24 年度は町の保健師と相談し、町内外の仮設住宅で避難生活をしている町民が一堂に会し、町民同士の交流を深めることを目的とした「スマイル健康塾」と震災による町の健康課題であった生活不活発病予防を目的とした「スマイル農園」を開始しました。

学生たちは、その活動を通し、被災した方々から当時のこと、現在の健康状態や生活状況などさまざまなお話をお聞きし、被災住民の置かれている現状について理解を深めていきました。

このスライドは「スマイル健康塾」の様子です。学生が主体で行いましたが、町の保健師さんも参加して住民の方々に健康についてのお話をしていただきました。参加した住民の皆様は、久しぶりに会った友人との話に花を咲かせ、1 年ぶりに笑ったと笑顔が絶えませんでした。回を重ねるごとに住民の方々も踊りや歌を披露する場面がありました。

もう１つの活動の「スマイル農園」の様子です。畑を提供してくださった地区長さんは、活動当初から私たちが安心して活動ができるように陰日向なくサポートしてくださいました。また、岩手県立一関第一高等学校と附属中学校の生徒さんたち 50 人ほどが集まり、活動に参加したことで 150 坪もある畑がサラサラの土に変わりました。被災した住民の方々は学生たちに土の掘り方や畝の作り方、苗の植え方などを生き生きと教えていました。

学生達は、戸惑いや力不足など様々な困難さを感じながらではありましたが、ボランティア活動を通して被災地の状況を学び、被災住民との交流経験を積み重ねていきました。また、その中で自分たちのボランティア活動についての意味付けを深めていました。住民との継続的な交流を持つことがいかに重要な要素であるかがわかります。

さらに、学生たちからは「高齢者の方と話をするのが得意になった」、「参加者の安全に気を配れるようになった」、「人との関係性の作り方がわかった」、「気づかなかった自分の力を活動の中で引き出してもらえた」、「就職してからもこのときの経験が役に立った」などの声が寄せられています。このようなことも、学内での教育や実習では身に付かなかった成果だと考えております。

東日本大震災をきっかけとしたボランティア活動を経験した学生たちの学びを振り返ると、継続した地域住民とのかかわりを通して、高齢者の理解、コミュニケーションの取り方など対人サービスに必要な力が身についたと考えられます。そして、看護をする上で良好な人間関係を築くことは、看護活動の根幹をなすものであり、地域住民との直接的継続的なかかわりこそ看護学の基礎を学ばせる上で必要な経験であったと考えます。

最後に、きょう、「スマイル農園」では今年度の最後の収穫を行い収穫祭を行っています。今年度は参加できませんでしたが、サポーターさんたちから「宮城大学が作ってくれた畑があっての私たちの活動ですから来年は来てくださいね」とお誘いを受けました。この絆をどうしたらつないでいけるのかが今後の課題だと思っております。

ご清聴ありがとうございました。

押切：佐々木先生、ありがとうございました。

きょう登壇されている方に佐々木さんが 2 名いらっしゃいますので、下のお名前で呼ばせていただくこともあるかと思いますが、よろしくお願いいたします。

早速、久美子先生からのお話で、学内だけで勉強しているのではなくて現場に出て行って、しかもボランティア活動ということの中でいろいろな気づきをもって、そこで新しい発見、学びをしていくという先ほどの結城先生のお話にもありましたが、現場、地域とのかかわり合いというものの一つの実践例がここで紹介していただけたのではないかと思います。

次は佐々木秀之先生、お願いいたします。

佐々木（秀）：皆さんこんにちは。事業構想学群の佐々木秀之と申します。

私が所属しております事業構想学群は、事業プランニング学類、地域創生学類、価値創造デザイン学類という 3 つの学類から構成されています。私は、そのうち地域創生学類の担当になっており、多くの地域と連携しながら活動を展開しています。地域創生学類は、大学改革によって、新しくできた学類です。

まず最初に紹介させていただきますのは、大学改革に合わせて新しくスタートした地域フィールドワーク、また、震災後にスターとしましたコミュニティ・プランナーという科目についてです。

これらの科目は事業構想学群だけではなくて、3 学群が一緒にやっている科目ということになります。

宮城大学の 1 年生は、4 月から地域フィールドワークという科目で県内の自治体に 400 人が飛び出します。実は全国の大学で、必修科目として 1 年生の段階で 400 人のフィールドワークを行うというのは全国初でした。ゼミなどで地域に行くとのとは違って、400 名の必修科目で行うということは、試行錯誤の連続でした。フィールドワークを経て、さらに地域で学びたいという学生は、2 年生前期から 3 年生前期にかけて、コミュニティ・プランナーという科目で学びます。その後それぞれのゼミに入って専門性につなげていくという科目構成になります。

先ほどの結城先生のお話の中に出てまいりました鳴子鬼首の米プロジェクト様には、お世話になりました。そのときの写真です。

去年の 4 年生なので今社会人 1 年生になった学生たちですが、右上がおにぎりを握っている写真です。ここに吹き出しをつけるとしたらどういう言葉が入るでしょうか。笑顔の様子をみていると、「楽しい」「うれしい」「面白い」と入れたくなるかもしれませんが、実際は「熱い」というコメントでした。地域のお母さん方に、美味しいおにぎりの握り方を教わりながら、地域の暮らしや知恵や技を学んでいます。地域の皆さんも、次の世代を担う若者に、多くを伝えようとしてくれています。

今年も多くの地域にお世話になっています。写真はコミュニティ・プランナーにおけるフィールドスタディの様子です。上 2 つは石巻の荻浜という漁村でリボンアートプロジェクトと一緒に学生が屋台をつくって、あなごの出汁を使った商品開発をしている写真です。左下は宮城県美里町にある「でんえん土田畑村」という約 20 年前に建てられたグリーンツーリズムの拠点施設を、私たちならどのようにリノベーションするかという考えを地域の方と巡らせている様子です。右下は富谷市の旧宿場町にあたる新町通りという通りにある味噌醤油屋さんの跡地をどう活用するかということで、100 人アンケートを行っている写真です。

このような形で地域に入って、学生たち地域から多くの事を学び、それぞれのプロジェクトにつなげていきます。

最後に、地域連携センターの紹介もさせていただきます。地域連携センターにおいても、地域の課題と大学の資源をいかに結びつけるかということに積極的に取り組んでいます。地域連携センターでは、研究の視点からや共創プロジェクトという形でいろいろなセクターと協同し、地域にイノベーションをもたらすことを目指しています。

私からの紹介は以上となります。

押切：佐々木秀之先生、ありがとうございました。

早速続いて地域外に出て行って現場で実践しながら学んでいくという展開をもうすでに見せていただいて、特色に驚いているところですが、そこに重ねていくように川村先生からもご紹介お願いいたします。

川村：食産業学群と基盤教育群の視点からということで、私は食産学群の教授であると同時に基盤教育群という組織の長もしておりますので、その 2 つの視点で、きょうのキーワードになっている地域、宮城、宮城大学にかかわるようなところで、なおかつ両佐々木先生が触れないような部分を狙って変化球を投げてみようと思っています。

最初のスライドにケイパビリティという言葉を入れておりますが、宮城についてのケイパビリティを高めようということで、私が食産の 4 年生に対してやっている授業の最後のところで話していることを少し話したいと思います。

ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、アマルティア・センという方は経済学者であり哲学者であります。この方が言っていることの 1 つにケイパビリティという言葉があります。なぜこのケイパビリティという言葉が出てきたのかという背景を話すと長くなりますので簡単に言いますと、この先生はインドの出身ですので、飢餓の問題を扱っていたのですが、飢餓の問題というのは実は食べ物がある、ないではなくて、豊作であっても飢餓は起こる。それは農作物をどう扱うかという、まさにケイパビリティというものがないから起こってしまうのだということを言っています。難しい言葉で「諸財の有する特性を個々人の財の利用、能力、資源で変換することによって達成される諸機能の選択集合」と書いていますが、私に言わせると、食料を利用して達成できる、これは人によって違ってきます。そこがケイパビリティの差ですよという話です。わかりやすくこんな図を作ってみたのですが、食材王国みやぎ、食材はたくさんあります。その食材を食べるところにどう変換できるかと言いますと、ここは人によって能力が違ってくるわけです。これは県庁のホームページから取ってきたのでレシピつきなのですが、これならば作れるかもしれませんけれども、伝統料理のおくずかけになってくるとこれは作れる方は作れるけれど作れない方は作れないということになってくるかと思います。

こういうおいしそうなものでも、作る方の能力によってまったくおいしさが変わってくるということです。

今、料理だけお示ししましたけれども、料理だけではありません。食産業学の中で言えば、例えば同じ宮城の食材を使っておいしいものだけではなくて安全・安心なものを供給できるとか、あるいは食品の機能性を高めるとか、そういったことができるか、できないかというのもまさにケイパビリティの能力によって違ってくるということになります。

さらに言えば、宮城について宮城の地元ということのわかり方を対象にしても同じことが言えると思います。宮城にはいろいろなものがありますが、そこからいろいろな能力を引き出せる力は人によって違ってくる、ケイパビリティが違ってくるということであります。

例えば宮城の食材を使って優れた食品を開発するとか、宮城の自然環境を生かして優れた環境教育ができる、あるいは宮城の農村の結の文化を使って新しいコミュニティの形成をするというようなかかわり方、あるいはそこから引き出す力が重要になってくると思います。

そういうことを教えるのが大学の役割の 1 つではないかと思います。スライドに責任という言葉を入れましたが、まずは高いケイパビリティを持った人間を育てていく、宮城なら宮城を素材にしてもそこからいろいろなものを引き出せる人材を作っていくことが必要だろうと思

いますし、得た力は社会で生かしていくことが必要になってくると思います。

これは食産業学についてもそうですし、宮城についての地域についての知識、あるいは地域の中での活動ということについても同じだと思います。さらに言いますと、社会の中には弱者、強者いろいろな方がいるわけですけれども、社会の中での弱者ということについても考えを及ばさなければいけません。

宮城のことについて、いろいろなことを知っている方だけではないということになると、そういったことをケイパビリティの高い人はいろいろな形で示していく必要がありますし、特にうちの大学の学生たち、宮城大学は公立大学でありますけれども、ここで学んだ者たちは、いろいろな意味でケイパビリティを社会に還元する責任があるのではないかと思います。

このようなことを食産の授業の中では話しているのですけれども、きょうのキーワードにも通じるところかと思っています。

もう１つ、具体例ということでいくつか持ってきましたが、これはご承知の方も多いかと思いますが、今年の6、7 月にスーパーの菓子パンコーナーにこの商品が並んでいたのをご覧になった方もいらっしゃるのではないかと思いますが、食産業学群の中では、例えばここに示しましたような演習の授業の中で、白石食品工業株式会社様と協同で宮城の食材を使ったパンの開発もやっています。あるいは授業ではないのですが、学生の有志が株式会社藤崎様と協力してこういったお中元のセットの商品を開発したりしています。

こういう商品の開発の際には、学生たちが日ごろ学んでいること、知識が生かされているということはもちろんですが、このほかにもいろいろな研究プロジェクトにかかわるような形で学生たちはいろいろなケイパビリティを発揮しているところでありますが、わかりやすい例ということでこんなものを示してみました。

もう 1 つ、基盤教育群ということですが、基盤教育群というのは学びの能力をレベルアップすると言いますか、1 つの食産業なら食産業ということだけではなくて、学ぶということはどういうことなのか、学び続ける力を身につけるというのが狙いとなっています。そのほかの 1 つで、先ほど佐々木秀之先生からお話がありました地域フィールドワークというのが非常に大きな科目になっていますので、これを簡単にご紹介したいと思います。

地域フィールドワークはすべての 1 年生が必修の科目として地域に出て学ぶというのが特徴になっています。最初は講義からスタートしまして、小グループを組んで演習を行い準備をします。そして現地に出かけて市町村の中でいろいろなフィールドワーク、見学をして取材をしてきます。それをさらにまとめて発表するという流れで 1 年の前期に非常に力を注いでやっているところです。

これはいわば宮城を学ぶ、宮城で学ぶ、宮城とともに学ぶという性格の科目なのですが、地元をよく知るという意味で、まさに宮城県全体をフィールドとしてやっている授業です。こういった形で基盤教育群は地域とかかわっていますけれども、地域とのかかわりと言いましてもコミュニティだけではございません。例えば先日もこの場でトヨタ自動車東日本株式会社の会長にご講演いただきましたが、宮城県内で活動しているいろいろな企業な方との接点も非常に大事にしているところでございます。

中途半端な話で恐縮ですけれども、私のほうからは以上です。

２． 宮城大学発「FEC 自給圏構想」

押切：川村先生、ありがとうございました。

今、宮城大学の各学群で取り組んでおられる活動、その多岐にわたるところをお伺いして、本当に学校の外でも中でも、いわゆる机上ではない部分でもいろいろな活動をされておられてそれぞれ成果に結びつけておられるのだというところを私もきょう初めて具体的に知ったのですが、このあたりのところから、結城さん、最初のほうで地域ということとかコミュニティということについてお話いただいたのですが、結城さんと打合せをしているときに FEC という概念についてもお話いただきまして、今、川村先生からもケイパビリティというなかなか耳慣れない言葉で勉強になったのですが、そういう社会におけることに対してどう向かうかというときのとらえ方としての FEC というのが今お話いただいていることとつながるのではないかと思いますので、そこらあたりから少しお話いただけますでしょうか。

結城：今の 3 人の先生のお話を聞きながら思っていたことがあります。

それは内橋克人さんという方がいます。この方はどこかに頼るのではなくて自分たちで自給するものとして地域自給権という形で FEC、F は food、E は energy、education を含めた地域、C は care です。医療、介護、福祉、この 3 つはどこか国にとか霞が関にとか、どこかにではなくて地域が自分たちでできるようになっていくために、その力でやらないと存在自体が壊れてしまうという内橋さんの「FEC 自給圏構想」というものを少し勉強させていただいて、宮城大学のことを考えるときに、ここのために言われたような言葉だと思ったので、これが学生と大学と地域が連携することの中に出てくると、多くの人が安心するので、先ほど佐々木先生がおっしゃった一人暮らしの人が話したがっているというのはフィールドワークをしないとわからないです。どこにも書いていません。

何か難しいことではなくて、ご飯を一緒に食べようとか、買い物してきてあげるよとか、当たり前のところからお互いの存在が支え合っているところになれるという意味ではきわめて人間的でして、ケイパビリティも含めて内橋克人さんの「FEC 自給圏構想」を宮城大学から始めようではないかというのを言ってみたくなりました。

押切：宮城大学はいろいろな特徴を持っておられて、きょうもすでに活動実績を見せていただいて、こんなにいろいろなことをやっているのだというところで、これから向かうべき方向、これからどうしていくのかということもこれから話していきたいと思うのですけれども、そのときに、ここに鈴木素雄さんがいらっしゃるのですが、鈴木さんは実は宮城大学が建学されるときからジャーナリストとしていろいろなことでかかわってこられて、この間までの変遷を見てこられて、これからどうなっていくのか、どうしていくべきなのかというところも考えておられると思いますので、そこのあたりをお話いただけますか。

鈴木：皆さん、こんにちは。河北新報の鈴木素雄でございます。 押切さんから宮城大学で何か話してくれと言われたときに、何を話そうかと思っていたのですが、宮城大学の出自の話からしたいと思うのですが、1997 年の開学ですので今年で 22 年ですから、ちょうど今の 4 年生がオギャー生まれたときにこの大学が開学していることになります。そのとき私は当時遊軍の記者として開学前後のこの大学の取材をよくしていました。

初代の学長の野田一夫さんというのは大変ユニークな方でして、一言で言うとぶっちゃけた方でありまし

た。とにかく起業家、アントレプレナーを数多く輩出するのだということを強く言っていました。

考えてみますと、97 年というのは日本のバブル経済が崩壊して、失われた 20 年の真っただ中でありまして、銀行が破綻したりして大混乱した時期で、学生さんも就職難の時代でしたので、大企業に入って 40 年間悠々自適の暮らしをしようなどとはなかなか想像しにくい時代でした。

そんな中で、開学を強く推進したのは本間俊太郎知事でした。この方はご存じのとおりゼネコン汚職で逮捕されて開学が 1 年延びるという大混乱の中で大学は出発しています。学部も 2 つ、最初は観光系学部を構想していたのですが、国との協議でうまくいかなくて事業構想学部となった経緯がありまして、そんな混乱状況の中でこの大学が船出をしたということはよく覚えています。

ただ、学生の人気はすごくて、初年度の倍率は前期で 30.7 倍、後期で 40.4 倍という非常に期待をもって開学した県立大学でした。ただ、このころ東北の各県では公立大学の開学ラッシュで、岩手県立大学や東北芸術工科大学など 10 校ぐらいがこの間で開学をしています。首長さんの手柄にしたいという思惑ももちろんあったのでしょうけれども、少子高齢化、あるいは地域振興が強く求められていましたので、自前で地域に貢献してくれる若い人を育てたいという切実な願いがあったということだと思います。

宮城大学はできるだけ自分の足で立って、できることなら自分たちで飯の種まで見つけましょうという非常に野心的な理念で開学した大学でしたので、学生さんも私の知っている限りとんがった人間が非常に多くて、1 期生、2 期生にはユニークな学生が多いです。

22 年と言えば人間であれば一人前の大人ですので、ここでもう一度宮城大学のあり方を再定義する時期にきているのではないか。だからこうしたシンポジウムで宮城大学の再定義をしようということではないかと思いまして、きょうはそんな思いでこの場に立たせていただいております。

私なりに考える大学像や新しい若者の学びの考え方についてはこの後申し上げますが、先ほどの 3 人の方から伺っていると実学ということを現場の中で見いだしていこうという 3 つの学群ともそういう方向性に向いているということだけは確認できましたので、その方向性の中で議論をしていければと思っています。

3.各学群の今後の展開

押切：ありがとうございます。ジャーナリストの流れになってきました。

建学から変遷も話されました、現在のことも鈴木さんなりに思うところもあるかと思いますが、これからというときに、先ほど発表があったように多岐にわたるさまざまな実学があります。それぞれの学群の特徴も生かしながら、そこが持っている知見であるとか蓄積されているさまざまな知性などが恐らく連携していくことによって次の展開になるのではないかということを下地に思いつつ、それぞれの学群の一先生としてどのように今後進めたらいいのかというところをお話いただきたいと思います。

川村先生からお願いします。

川村：展望するのは難しいのですが、食産業学群というものについてもう少し補足させていただきたいと思います。農学部でもなければ家政学部でもない食産業というところで、できたときには全国でも唯一で似た

ようなものはなかったのですが、幸か不幸かわかりませんが、似たようなコンセプトの学部が最近よくできてきまして、世の中に認知されたのか、競争相手ができたのか、見方によってハッピーでもありアンハッピーでもあるのですが、そのような状況になっています。

食産業ということで考えますと、先ほど結城先生からフードということで地域での自給というお話がありましたが、一方でグローバルな世界で動いている部分があるわけです。私どもは食産業学を考えるときに、地方というところで考える一方で大きな世界の中でのということも考えざるを得ません。それからある部分フードサイエンスということになってきますと、これまた世界レベルで動いている部分がありますので、気持ちとしては地域というのを片方の目で見て、反対の目で世界を見るという気概が必要だと思っています。

恐らくどちらも必要なのですが、地域の中にある意味では身を置かないと、本当の食の部分はわからないところがいっぱいあるという感じはしていますので、そこはうちの立地条件として大事にしていきたいと思っています。

うちの学生たちはこちらが声をかけると動き出すということがありますので、大学の学びの場というのは教室や演習といったものだけではなくて、学生の自主的な動きを促すとか、あるいはそれをサポートするというのは今でもやってはいますが、それをもう少し進めていくことが多分これから必要になってくるのではないかと思いますので、もっと力を入れなければいけないと思っています。

具体的なところまでお話できるといいのですが、今のところはこのように抽象的なところでお許しいただければと思います。

押切：ありがとうございます。

三者の方からお話を伺いながら進めていきたいと思いますので、各群の中ということもありますが、秀之先生のほうから、これからどんな形で連携や方向性を考えていらっしゃるか、お話いただけますか。

佐々木（秀）：宮城大学のこれからという話の前に、今、鈴木さんから宮城大学の開学時の話を伺いこれまでを少し考えてみたいと思います。

22 年前というと、私自身は 23 歳の頃ですので、大学を卒業して間もない頃です。たしかに宮城大学は注目されていました。私の持っていたイメージは、例えば企業と連携して何かコラボレーション商品を作りそれをアエルに店舗を設けて販売したシーンであり、良い意味でセンセーショナルでした。

20 年たった今、大学と企業が連携する事例は減ってきているのではないでしょうか。企業の側も学生と連携してものを作るというより、企業も単体でのものづくりが厳しいなか、オープンイノベーションという形で、企業同士の連携も含めて、多様なセクター間での連携を活発に進めています。こうした状況の変化があって、では大学はどこと連携するのかといったときに、今、地域というものが、それもよりローカルな地域が注目されているのではないかと思います。

先ほどの結城さんのお話の中に、岩手の奥のほうに東京大学の学生が来ているということでしたが、20 年前はあり得なかったことです。逆にそれを考えると、むしろ首都圏も地域に注目しているということで、地域でイノベーションが興せるという流れなのだと思います。それは先ほどの川村先生のお話にもありました

が、これは日本だけではなくて世界的な話でありますし、私たちも地域フィールドワークという科目を作るときに、コミュニティベースドラーニングというアメリカでの地域学習のスキームを参考にしています。グローバルな視野を持ちつつ、ローカルなアクションを展開するということが、今の潮流なのかと思います。

ということで、これまでの 20 年を振り返りながら、現在を考えてみましたが、私は 20 年後にちょうど定年になりますので、私自身は今始まった動きをきちんと進めていきたいと思います。もちろん 20 年後にはまた違った連携のあり方が出ていると思いますので、その辺を視野に入れながら取り組んでいきたいと思います。

最後に、先ほどの FEC 構想という結城先生のお話がありました。経済学者の内橋克人先生が提唱した言葉だと思います。食資源学群ですとフード、看護学群はケアということでピタッとはまりますが、E を事業構想学群に置き換えるとすると何がいいのか、先ほど開学のときはアントレプレナーという話がありました。これも E から始まると思いますし、結城先生が言われた education、あるいは内橋先生の提唱された energy もあります。E で始まる単語を書き出してみたのですが、例えば earth 地球が思い浮かびます。Earth-quake となると、地震になります。台風災害の災害ボランティアや東日本大震災の復興過程からの学びは今も行われています。あるいは ecology 環境、economy 経済もあり、また electron 電子もあります。E で始まる単語は数多くあり、どれも当てはまるかと思います。いずれにせよ、宮城大学の 3 学群を 1 つのキーワードで結ぶことは、強みになっていくと思われます。

押切：ありがとうございます。

秀之先生から FEC を上手にまとめてくださいまして、宮城大学のこれからというときに、宮城大学式の FEC があるのではないかと思いました。佐々木久美子先生のほうには C の部分の care というところからこれからについてお話しいただけますか。

佐々木（久）：私からは、せっかく東日本大震災のときにできた学生ボランティア団体が、一度 2018 年の 3 月に閉じました。その年の 10 月に今の 3 年生ですが、なぜそんな大事な活動をやめたのですかと講義が終わった後に私のところに来てくれた学生がおりまして、またそれが今復活しているところなのですけれども、先ほどもお話しましたように学内の講義とか演習、実習の中で基本を学んだ上で、さらにそれを講義とは関係なく自分たちの課外活動の中で力をもっとつけていくことが自然に自分の身になっていくのではないかということを実感しておりますので、私はあと数年しかおりませんけれども、その中で形にしていけたらいいと思っています。

それは私一人だけでできるわけではなくて、やはり学群の先生方のご協力も必要ですし、お父様、お母様方のご協力も必要になってくるかと思います。しかし、看護学群は国家試験がありますので、指定規則に縛られた授業がありまして、なかなか平日の時間を使えることがないので、土日を使っての活動になってきているので、そういったところの工夫も今後必要になってくると思います。

何にしましても、やはり地域に出て、地域の住民の方々の力を、あるいは自治体の保健師さん、地区組織の方たちの力を借りながら、学生たちが大きく成長していくというのはこの活動を通して実感しているところなので、ぜひこれからもそういった活動ができるように

環境を整えていくことが大事なのではないかと思っております。

4.地域の「かかりつけ大学」として

押切：ありがとうございます。

今、それぞれが連携していける環境を整えていくことが大切だということをいただいたと思いますが、先ほど結城さんからいただきまして私も振りましたがFECというところを起点に話をしまして、私はこの話を最初にいただいたときに、社会にあるさまざまな課題とか解決するべき問題というのは、宮城大学のそれぞれの学群の方々、宮城大学そのものでも持っておられるさまざまな知性の蓄積があれば、ほとんど解決がつくのではないかと思いました。

これから社会でいろいろな展開をしていくときに、それに向かってどういう方策を立てられるのかという方法論も、先ほどは宮城大学型の FEC という言い方をしましたが、そういうところの連携や協力体制、また地域に出ていくフィールドワークであるとか、この包括的な活動が非常に可能性を持っていると思いますし、すでにもう大きな意味を持っていると思うのですが、この流れでいきますと結城先生に飛びそうなところですが、宮城大学の物理的に持っている可能性、ソフト的に持っている可能性、これまでの歴史から今日、それからこれからについてというところで、鈴木さんのほから少しお願いできますか。

鈴木：宮城大学はどういう大学を目指すべきなのか、キャッチーな言葉が一番いいのではないかと思います。医者の世界でかかりつけ医という言葉があると思うのですが、高度先進医療ではなくて近所でいつも面倒を見てくれる親切なお医者さんです。のどが痛いとかお腹をこわしたといったときにすぐ駆け込んで、顔見知りでいつも適切なアドバイスをしてくれて、お茶飲み話をしてくれるようなかかりつけ医の存在というのがこれから大事になってくると思います。医療費抑制のためにもかかりつけ医にかかりなさいという厚生労働省のよこしまな考えは抜きにして、宮城大学は県立大学である以上、宮城県民のためのアカデミズムを目指すべきなのではないかと思っています。

話は変わりますが、「風をつかまえた少年」という映画がございます。小説にもなっているのですが、アフリカの最貧国、干ばつに悩むマラウイという地域は、呪術的な村なので雨ごいなどをするしかないのですが、彼は学費も払えなくて中学校を退学になるのですが、図書館に入って本を盗み見して自分で風力発電の装置を考案して作ってしまいます。井戸水を風の力でくみ上げて農地を潤して農耕できるような状態にするという実話です。地域課題を科学の力を借りながら解決するという本来の意味での「学び」の原初的な形を表している。非常にいい話だと思いました。

学ぶというのは18歳では偏差値が重視され、先生が言ったことを要領よくまとめるとか見せるとか、そういう学びのスタイルがあると思うのですが、本当の学びというのは自分から知識を取りに行くとか、誰かのために、何かのために、本当はそういうものだと思っています。

この少年の話は、アフリカの最貧国で起きた話ですが、恐らくは学問が持っている最終的な目標の形だと思っています。宮城県に関して言いますと人口減少がこれから始まります。仙台は 108 万人いますが 2017 年にもう自然減に転じていまして、来年からは減っていくことになります。人口がシュリンクしていく中で、どうやってこの県を持続可能性を持った県にしていくのかという産業構造も含めた社会問題の解決のために学び、学生の知恵を貢献させていくかというところに 1 つのポイントがあるのだろうと思っています。その方向で 3 つの学群がほとんどの人間のライフサイクルの中で 3 つの知見を生かせば解決できるポテンシャルを持っているわけですから、これを現場にいかにフィードバックしながら大学を運営していくかというところが鍵になると思います。

地域連携センターのホームページを拝見するといろいろなシーズの話が出てきておりまして、非常にユニー

クな研究をされている方が多いので、これをうまくコーディネートする力がこれから必要になるのではないかと私なりに思っています。

押切：ありがとうございます。

コーディネートする力、それから今、鈴木さんの中であった今後宮城県のことを考えてかかりつけ医のような大学というとらえ方がありましたが、そういうことも含めて結城さんのほうで何かこれからについて提言的なところいかがですか。

結城：佐々木（秀）先生が関心を示しておられてありがたかったです。

宮城大学 FEC プロジェクトというものを作りませんか。同時に FEC ファンドもバックボーンとして市民と、そういうことで予算がついたらではなくて、こうしなければいけない、こういうことは大事だという思いが集まってくる、力になるプロジェクトを宮城大学が、それが結果として宮城のかかりつけ医、宮城大学というふうになっていくような気もします。

もう 1 つは、世界との関連というところから言いますと、一例を挙げますと宮城の海藻は気仙沼ですと 92 種類食べられるそうですが、実質的には 10 種類ぐらいで終わっていますので、それらを生かす道として、かつての旧ソ連は薬品として海藻は全部国が管理していました。ですから単なる薬草ではなくてそうすることによって世界とつながっていく宮城の地域の資源からいろいろなテーマが出てくるような気が私はしています。

そういう意味でどこよりも宮城のことがわかる、困ったな、どうしようか、宮城大学に相談してみよう、意見を聞こうというようになるような、これからを考えるときにまずかかりつけ医に行くということはそういうことですので、最初に誰に言うかと言うと、宮城大学に相談しよう、あそこに頼んでみようとか意見を聞いてみようというように市民の暮らしが宮城の将来、仙台についても同じです。そういう意味では、これからは消費者だから、単なる市民だからではなくて、その力はこうやったら活かせる、ああやったらできるということをコーディネートしたりしていく宮城大学 FEC プロジェクトを始めてくださいということを訴えます。

5.学群連携による「宮城学」に向けて

押切：きょうのサブタイトルは宮城学に向けてです。宮城学というのと FEC を読み替えてもいいのではないかと思いますが、一応そういうお題にとらわれなく進めたいと思いますが、今、かかりつけ医ということや何かあったときには宮城大学に聞いてみようといったときに、この問題だったらまずはケアのほうだとか、これなら食のほうだ、事業構想だなという形でいくと思うのですが、そのときにやはり横で連携していただいて、これはもう食のことだからこれで終わりではなくて、これは実はここともに関連があるという形で総合的な力を発揮していただきますと、病気になったり、困ってお医者さんを訪ねて行った患者としては非常にうれしい状態だと思いますので、そういう投げかけもありながら、先ほどはこれからということもあったのですが、宮城における FEC、食、エネルギーととるのかエデュケーションととるのか、E はいろいろありますが、ケアのことを含めて、3 週目に入りましたので、秀之先生からお願いします。

佐々木（秀）：やはり、教員が科目の中身はつくりこみますが、その中で学生がいかに自主的、自分事になっていくかということを考えていかないと、どんなプロジェクトも持続しないと思います。

例えば地域系の学習では、最初に地域フィールドワークという形で地域に入りますが、それぞれの段階に応じで学習目標があります。地域に入るというと、やはり学生にすぐ、ではどんな提案をいただけるのですかという話になるのですが、そういうことではなくて、まず学生が地域にはいってみて、どういう気づきを得たかということから始めています。そこからステージを上げて、最終的には何らかの提案という形で、エビデンスに基づいたプレゼンを目指します。そのなかで、地域活動が自分事となり、地域に魅力や可能性を見出すこともあり、その後さらに専門を深めていった結果が結集していけば、地域に必要とされる大学になっていくのかと思います。

ですから、大学をどうするかと考える場合、学生たちの目線で見ることが大事なのではないかと思う訳です。学生たちは、特に東日本大震災などもあって、自分たちの地域を輝かせたい、魅力あるものにしたいという思いを強く持っていると感じます。そういう学生たちの目線に立った何らかの工夫が必要ではないかと思います。

思い付きで話しますと、地域だけではなくて、例えば仙台の街、あるいは首都圏に行ってプロジェクトを展開するという学生も多くいますので、そういう学生にきちんと光が当たるように、例えば河北新報の一部に小さくていいので、学生が書くような場面を作っていただくのはいかがでしょうか。大学を盛り上げていくのは大学内だけではなく、社会全体で盛り上げていかないとそういう動きにはならないと思いますので、最後に勝手なご提案をさせていただきました。

押切：ありがとうございます。

宮城大学だけではなしに、地域との連携、地域の中にはマスコミ、河北新報さんとの連携というのも大事だというところは、こういう場で話しにくいことがすぐ話せて便利です。証人がいっぱいいます。

鈴木：一言だけ。先日、東北大学である講義をさせてもらったのですが、1 年生対象で 20 人ぐらいでした。この中で新聞を読んでいる人はいますかと問いかけたらどれぐらいいたと思いますか？　2 人でした。つまり 10%、今の学生で新聞を日常的に読んでいる学生が 10%程度で、家で新聞をとっている人は 4 人、2 割でした。これが実態です。

新聞はオールドメディアで、このままですと、今 20 代、30 代の記者たちがご飯を食べられなくなることになるので、これは深刻な問題でもあるのですが、われわれも特に学生さんに読んでもらいたいのです。その努力をわれわれなりに考えなければいけないので、今の話も含めて学生さんにページを開放するといったこともこれから考えなければいけないと思っています。

佐々木（秀）：多分ですが、それで少しは発行部数も上がる可能性もあると思いますので、ぜひご検討をお願いしたいと思います。

押切：このような前向きな大会がシンポジウムのいい成果だと思います。

という展開に持っていけるのはありがたい進行だと思いますが、久美子先生、お願いします。

佐々木（久）：私も佐々木先生とかぶっているかもしれませんが、学生ボランティアの学生さんたちと一緒に活動していまして、主体性というところがなかなか身につかないと思っています。それは震災の直後は地域がごたごたしているので、向こうの住民の方たち保健師さんたちが困ってはいけないと思いまして教員が前面に出ていたのですが、今の平時においては、学生が自分たちで考えて動けるところまで持っていきたいというふうに思っています。

カリキュラムが変わって地域フィールドワークで学生たちは学んでいますので、その応用編ということで課外活動としてさらに発展できたらいいのではないかと思っています。

看護学群の教育の中でも、地域を診断するとか、そういったこともやっていますので、そういった地域の健康課題を自分たちで見つけて、それを展開していくにはどうしたらいいかとか、そういったところを地元の保健師さん等と検討しながら活動を展開していけるようになるといいと思っています。

なぜ保健師さんと検討と言うかと言いますと、やはり地域の住民の方々の健康を守っているのは行政の保健師さんたちなので、そこに土足で入っていくということは東日本大震災のときにすごく嫌がられたわけです。ですからそこはきちんと、ボランティアはあくまでもボランティアであって、いずれ地域の保健師さんたちにお返しするというスタンスのもとでやっているので、保健師さんとは手を組んでいきたいですし、地元の地区組織の方たちとも手を組んでいきたい、その醍醐味は保健師になる学生たちは余計その必要性を学ぶことができるのではないかと思っています。

押切：ありがとうございます。

ボランティアを通して活動をされている経験、それから場合によっては対立的なことになりそうなところでもお互い視野を見ていって、これからそういう世界に入って行くということも含めて学生が時期だけで考えるのではなくて地域に生きていくという視点で考えていくとまた新たな展開も出てくるということは大事なことだと思います。C の部分のことを言っていると思いましたら、ちゃんと看護のほうから話していただいてありがとうございます。

川村先生、まとめる感じでお願いします。

川村：まずは新聞の部数ですけれども、これはウェブでは学生たちはそれなりに読んでいます。ですからやはり情報源として非常に貴重なことは間違いありません。御社が儲かるかどうかという点はまた別な話になりますがそのように思います。

先ほどの、かかりつけ大学という話ですが、これは非常に大事なお話をいただいたと思います。考えていただければわかりますが、仙台には東北大学その他がたくさんございますけれども、看護は看護という名前ですからこれはわかりやすいと思うのですが、食産業学や事業構想学という学問の名前をつけているところはほかにはありません。そもそものところで産業であるとか事業であるとか、現場を意識したものでできているというのがうちの大学の成り立ちだと思っています。

われわれとしてもそういうつもりで地元、あるいは地場の産業ということを意識しながらいろいろなことをやっているわけですけれども、それにしてもまだ大学ということで敷居が高いと感じられているのであれば、少し広報その他を展開していかなければいけないと思いますけれども、そもそもうちの大学はかかりつけ大学を志向しているということ、これからも恐らくその方向でいくということ、もっと言いますと、そういう方向でいくことがうちの大学の特徴の出し方になってくると思います。そこはこれからもしっかり今まで以上にやっていきたいと思っています。

FEC プロジェクトですが、これはどのレベルで地域の自給というものを考えるかというのはとても難しい問題です。先ほどの結城先生のスライドの中で県別の自給率がございましたが、くしくも県単位で見るのか東

北地方全体で見るのかでまったく数字が違ってきます。

さらに言いますと市町村別になりますともっと違ってきますので、地域をある程度まとまった意識で持てるか、つまりわれわれ宮城県が作った公立大学で宮城県というのを単位として考えてはもちろんいるわけですけれども、東北というところまで広げてものを考えるかどうかで、このFECの考え方もずいぶん変わってくるのです。

もっと言いますと、地域というものを東日本の中といったところまで考えるとまた全然違った展開もできるので、すぐにということではないでしょうけれども、そういった意味でのプロジェクトを考えてみるのは夢があることだと感じました。

6.まとめ

押切：ありがとうございます。

きょう、宮城大学のこれからの可能性、こういう方向に行ったほうがいいのではないかということを過去から振り返りつつお話できて、終わりの時間が近づいてきましたが、これまでの話を通して、また鈴木さんのほうから提言めいた感じになるかもしれませんが思うところをまとめていただけませんか。

鈴木：ありがとうございました。かかりつけ大学について、共感していただいて大変うれしく思います。

もう１つ、この大学の出自ができるだけ宮城県で食べていける道を自分たちで探しましょうということであれば、大事なのはお金の話であります。起業するにも何するにもお金がなければできないわけで、そこのところをどう考えるかということだと思います。大学発ベンチャーとか、東北大学さんは盛んにおやりになっているのですが、宮城大学もその辺についての手当てをそろそろ開学22年目ですので本腰を入れて考えるときにきているのではないかと思っています。

それは外部資金をということもあるのでしょうが、県立大学ですので税金を使うかどうかという別の問題があります。あるいは七十七銀の関係者がおられるかどうかわかりませんけれども、指定金融機関の七十七銀行さんに出していただいても構わないと思っていますが、学生発のベンチャーについてのお金の手当てをやはり考えるべきだろうと思っています。

その上で最後に申し上げたいのですが、私はかねてから知識には 3 つの種類があると思っています。1 つは教養知です。大学で言うとリベラルアーツと言いますか、読み書きそろばんといった基礎的な人間が生きていくための知識、教養知というのがあると思います。それから専門知というものがありまして、これは法学部の学生であれば刑法とか民法とかそういったものに当たると思うのですが、ここまでは大体大学で教えてくれ

るのだと思うのですが、もう 1 つ、野生の知というのが多分あるのだろうと思っています。野生の知とは何かと言いますと、先ほどから結城さんが盛んにここで事例を報告されましたが、このじいちゃん、ばあちゃんが長いこと培って経験の上の体得した知識、体を動かす中で覚えた職人技とか手わざという部類もそうかもしれません。農家がこのときはこのぐらい水植えしようとか、そういういわば自然と折り合って、あるいは人間と人間がかかわる中で培ってきた野生の知というものが多分あって、ここのところが恐らく先ほど言いました自主性とか共同体の中でどう自分の知を生かしていくかというところにかかわってくると思うので、野生の知とい

うのはフィールドワークとか現場に出ることでしか養えない知なのだと思います。

日本の教育は、やはりその野生の知を育むというところが一番弱くて、いじめの問題なども私はそこに原因があるのではないかと思っているのですが、ここを若いうちにどうやってみんなが経験の中で養っていくかということを大事にしてほしいと思っています。

開学の理念はそこまで含めた話だったと思うので、ぜひその方向で宮城大学を盛り上げていってほしいと思います。

押切：ありがとうございます。

かなり具体的に踏み込んだお金にかかわるところまでありがとうございます。

では、最後に結城さんからまとめをお願いします。

結城：野生の知というのはものすごく大事だと思います。どうしても経済社会の道をずっときたときに、お金で買えるものという話が強くなりすぎて、金がなかったらだめなのだ、弱いのだ、滅びるのだということになったけれども、そうではない人たち、私が話をさせていただいたのは、その土地を生きていくというときに大事なもの、稼ぐ力も大事だけれども、身近にあるもの、水であれ何であれ、木であれ石であれ、それを活かす力をたくさん身につけることが生きる力になるのだというふうにしてきたところを私は見てきまして、きょう一部ご紹介させていただきましたが、ああいう世界もぜひ宮城大学の FEC に入っているとありがたいと思いました。

押切：ありがとうございました。

きょうは、もともと命をつなぐという大きなタイトルがありまして、その中で宮城大学がどういう方向性を持っていけるのか、どういう可能性、価値を持っているのかという話もして、中からは宮城学というのが出ていたのですが、同じように読み解くような形で FEC、食、エネルギー、エデュケーション、いろいろありますが、ケアというところ、それらを包括的に持っているのがやはり宮城大学ではないかというところを再確認し、宮城大学内でも各学群が連携し、なおかつ宮城大学自体が地域のかかりつけ医として地域と連携していく。そこで宮城大学の存在そのものがこれからの社会におけるさまざまな課題や問題を解決するときのものすごくわかりやすいかかりつけ医であるという。これをさらにどのようにしっかり高め伸ばしていくのかというのはこれからまた考えながら行動していくことになると思うのですが、きょう、こういうシンポジウムという形はどうも初めてらしいのですが、せっかくこのような場が取れたので、通り一遍できょうはあんな話があってよかったというので終わるのではなくて、地域のかかりつけ医としての大学というのはどういうふうにいくべきなのか、宮城大学としての FEC はどういうものなのかということをまた考えられる場ができたらいいと思います。

きょうは皆様、どうもありがとうございました。ご清聴ありがとうございました。

ご登壇いただきました皆様と後援会関係者

左から、
川村保教授　佐々木久美子教授　押切珠喜氏
結城登美雄氏　鈴木素雄氏　佐々木秀之准教授
佐藤後援会長　武田後援会理事

記念品を贈呈

登壇いただきました皆様には、新澤酒造店様の御協力により作り上げたお酒「大学生の純米大吟醸」と結城先生がプロデュースし、鳴子の米プロジェク様が大事に育てられた「ゆきむすび」を贈呈いたしました。

本部棟１Ｆカフェテリアでのパネル展示

講演会開催にあわせ、教員、研究室、地域連携センター、復興人材育成プログラム推進室のご協力をいただき、来場者の方々に宮城大学の活動・研究の成果をご覧いただきました。

〒981-3298　宮城県黒川郡大和町学苑１番地１（宮城大学事務局内）
TEL022-377-8381　FAX022-377-8282